

昭和  
和  
原  
人

諸井  
薰

*moroi kaoru*



文春文庫

---

昭和原人

定価はカバーに  
表示してあります

1992年2月10日 第1刷

著者 諸井 薫

発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

---

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan  
ISBN4-16-749004-8

文藝春秋

江苏工业学院图书馆

藏 和 书 原 章

諸井熏



文藝春秋



# 昭和原人／目次

昭和原人 9

アナザワン 18

人ヒトノマサニシセントスルヤ之将<sup>レ</sup>死…………… 27

マイウエイ 36

老後海外移住への気がかり 45

シンプルライフ 54

客りんしよく舎について 63

カード・パニツク 73

制服 82

寵愛 91

われら「トウイナ―」 100

人名 109

インテリジェント・ビル 119

劇場ばやり	128
東京人コンプレックス	137
辛抱上手	146
憎税期	155
一朝目覚むれば……	164
諮問という名の民主主義ごっこ	173
「税革」岡目八目	182
多角化ばやり	191
就 職	200
職の貴賤	209
ああテンポラリー	219
「解説」の功罪	228
「不安産業」花ざかり	237





昭  
和  
原  
人



## 昭和原人

それは天皇陛下が手術を受けられ、その予後が注目を集めていた時期のことだ。

男は、天皇が入院されるというニュースに接したときから、なんとなくそわそわと落ち着かなくなり、新聞やテレビを常になく注意するようになるのと一緒に、なんとも名状し難い感慨が心中をうねって、一種昂揚感に近いものがふくれ上がってくるのが我ながら不思議であった。

世間が今度の天皇のご病気について、陰に陽にあれこれ取沙汰する関心のありようの裏に、へなんといいっても八十六歳の<sup>ご</sup>高齢でもあることだし……という、万一の場合への思いが大きかったのは否<sup>いな</sup>めず、男の動搖の根がそこにあつたのもたしかだが、男の中に昂<sup>たか</sup>まった感慨はもう少し複雑で、大げさにいえば自分の人生のすべてがこのこと<sup>き</sup>っかけに、いまいきなり煌<sup>こうこう</sup>々とライトを浴びて一気に照し出されたような気持になっ

たのである。

男は昭和二年の早生まれである。ということは、今上天皇の即位と改元が大正十五年の十二月だったから、学齡的にいえば歴とした昭和元年組ということになる。

男が子供の頃歌わされていまだに頭にこびりついて離れない歌に、

「昭和、昭和、昭和の子供よ僕達は……」

というのがあったが、当時男は、へそうなんだ、僕らこそ昭和の子供の第一号なんだと、子供心に胸を張ったものだった。

男は、天皇のご入院を知ったとき、どういふわけかふつとこの歌が唇に泛かび、天皇のご病気に対する気がかりに止まらない、自分の中の動揺の根のありかを見たような気がしたのである。

へ考えてみれば「昭和の子供」も六十一だからな

男はそう呟きながら、自分の内部のエネルギーが空気洩れでもするようになり、みるみるうちにしぼんでいくような感じになった。

男は今年六十になった。役員になっていたから、今年定年退職をするはずのところ、よほどのことでもない限りあと五年は現役でいられるのはまず間違いない。しかも最近設立された子会社を男に任せるといふ社長の意向も聞いており、そうなれば七十までは頑張れそうに思っていたのだが、天皇の気がかりなご不例を知って以来、そうした可能

性への意欲がコロリとマイナスに転んで、自分に残された時間が、俄かに「余生」と化してしまったように思えるのだ。

男の父親が天皇と同じ年だったということもあった。その父を二十年前に亡くしている男には、天皇のご長寿があたかも自分の父親が生きて齢を重ねてもいるかのよう嬉しく、だから「不例と聞くと人一倍気にかかるのかも知れない。その天皇のご長寿のおかげで、『昭和の子供』の第一号が、定年年齢を越える六十過ぎまで「昭和」の中で生きてこられたという、これまでは考えてみたこともなかったその意味の重さが、自分と「昭和」に共通する六十年余りという歳月を、いま紛れもなく男につきつけるのである。

男にとっても「昭和」にとってもこの六十年は、感傷のフィルターでもかけないことには、正確に思い起すのがあまりにも辛い大変転の連続だった。

それでも、男が物心ついてから小学校を了<sup>お</sup>えるまでの日本は、世界的な大恐慌の波をかぶるといふこともありはしたが、表面に限っていえば少なくとも平穏な時代であり、小さな倅<sup>しあわ</sup>せの情景が街に溢<sup>あふ</sup>れていた。

昭和を戦前、戦中、戦後、そして高度成長期から今日に至る経済発展期の四つに分ければ、男の幼少期は戦前に属するものの、その水面下にはすでに戦争への予兆<sup>なま</sup>が滾<sup>な</sup>りは

じめていた。

男は東京の青山で育ったこともあって「天長節」や「陸軍始」に代々木の練兵場で行われる観兵式を何度か見に行った記憶がある。たしか「白雪」という名の白馬に乗られた天皇のお姿を遠目に拝しながら、その陽光にきらめく拍車のついたピカピカの長靴ちようかに憧れあこが、当時の男のいたずら描きの絵のモチーフはもっぱらその拍車のついた黒い長靴だった。

その観兵式が勇壮華麗な軍事ショーに過ぎなかったのは、男がせいぜい小学生だった頃までで、中学に進んでからというもの、当時支那事変と呼んでいた中国での戦争は拡大の一途を辿たどって、軍国調が街を掩おほった。

時間割の中に「教練」の時間がふえ、配属将校という名の現役の陸軍少尉が学校に常駐するようになり、当時流行はやった「兵隊ごっこ」を目にするのさえおぞましくなるほどに、厳しいスパルタ式の「しごき」が男達を震え上がらせた。が、その「教練」を男は満更嫌がっていたいなかったのは、配属将校が、乗馬姿の天皇と同じ拍車のついた長靴をはいていたそのせいだった。だから、男が当時陸軍幼年学校に行こうと熱っぽく願望していたのは、あきらかにその乗馬靴に惹ひかれるところが大きかった。

クラスで男を含めて三人が幼年学校を受けたが、男だけが落ちた。知らないうちに近視が進んでいたからだった。がっかりした男は反動的に文学書に耽溺たんできするようになり、

当時の多数派だった「軍国少年」に心ならずも背を向けることになった。

男は中学四年のときに軽い肺浸潤に罹り、そのおかげで徴兵検査で丙種の判定を受け、勤労働員には駆り出されたものの、とうとう兵隊には行かないまま、終戦を迎えた。

天皇のお声を初めて男が聞いたのは、その終戦の玉音放送だった。徴用先の工場の夏草生い茂る材料置場の原っぱで、ザーザーと雑音のひどい録音のお声を、ひとことも聞き洩らすまいと耳を澄ましたながら、男は泣いた。が、泣きながら、なんでいま自分が泣いているのかよく分らなかった。

戦争が終ったということは、遠からず自分にも訪れるであろうと覚悟していた死を、もう考えずにすむのだから躍り上がって喜んでもいいはずなのに、逆に見知らぬ広漠とした砂漠に一人放り出されでもしたようなあてどない絶望感に、全身から力が抜け落ちる感じだった。その脱力感と涙がどう結びつくのか、男自身にも不可解だったが、天皇の沈痛なお声が男の感情を大きく揺り動かしたのだけは確かだった。

へさぞやお辛いことだろう

男はそう思うと、あれほど戦争を呪い、それが一日も早く終るのを心待ちにしていたくせに、いても立っても立ってもいられないような、わけの分らない悲しみがこみ上げてきた。

終戦でこれから先の<sup>めど</sup>用途を失い、意欲もなくしてしまった男の父親は、母と弟妹を連れて郷里の岡山に引っ込み、ひとり東京に残った男は、学校へ通うよりはアルバイトと

いう日々の中をやっと生き延びた。

その頃のことだ、天皇がモーニング姿で、その肩までしかないマツカーサーと並んで撮られた写真を新聞で見たのは。占領軍の司令官をご自分の方から訪れなければならぬという屈辱感を、天皇はどのようにして耐えられたのかと思うと、わがことのように男の中に怒りが渦巻いた。やはりその頃、「人間天皇」を宣言されてか、させられてか、天皇は日本全国を回られた。その行く先々でソフトを打ち振られる天皇のお姿をニュース映画で見たとき、男はジーンとなつて、正視出来ずに思わず目を伏せた。

男は、ろくに勉強をした覚えもないまま、なんとか学校を卒業したものの、真面目に就職を考える気になれなかった。太宰治の『晩年』という短篇ではないが、自分の人生のこれからに何一つ期待も希望も持てそうになかったからだ。とどのつまり、給料がちやんと貰えるかどうかも怪しい小さな出版社に男が入ったのは、戦後復興とやらに浮かれ、闇屋やみやがのさばる世の中に、どうにもついていけそうにないという、その脱落の意志の現われと言つてよかつた。

男の結婚は二十五のときだった。相手は、同じ会社で働いていた二つ年上の人で、恋愛結婚というには、男の中の文学的概念規定にははるかに遠かつたが、男がそれによつて荒涼とした一人暮らしに訣別けつべつできたことだけはたしかだった。やがて二人の子供が生まれ、男はその生活を支えるために前のめりに働き続けているうちに、自分でも苦笑する



くらい勤勉な人間に変わった。男の勤め先も、高度成長の波に乗ってひとかど世間に知られる出版社になり、男のところもその余恵を受けて世間並み以上の暮しが出来るようになり、五十になったばかりのときに役員のはしくれに名を連ねるところまで辿りついたのだから、サラリーマンとしてはまあまあの方といえる。

男はここ二十年、東京の場所は欠かさず国技館に一度は行って大相撲を見物するのだが、そこで天皇を何度かお迎えした。すっかりお年を召された天皇の、無邪気に身を乗り出されて拍手をされているお姿に男は、「昭和も満更悪くなかったんだ」と呟きながら、胸がぼっと暖かくなってくるのである。

その天皇が今場所に限って国技館にお見えにならなかった。

男は、天皇のご病気に対する自分のこのこの感慨が、果して特殊なものなのか、それとも世代の違いで程度の差はあっても、皆似たような気持でいるのか、それが気にかかって昼休み、周囲の若い社員達になにげなく聞いてみた。すると、今年の春入社したばかりの二十三になる女子社員がこんなことを言った。

「……私、とてもショックなんです。なぜって、もしもそれで『昭和』が終ったら、それから先に生まれてくる子は昭和生まれじゃないわけだから、その子達からすれば、私達は『昭和生まれ』っていう旧人類ですもの」

へ成程、言われてみればその通りで、自分達も僅か一歳上に過ぎないのに、『大正生ま